

こども食堂での文化プログラム体験を通じた 多世代間の交流促進事業

(受託団体)

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ

(連携団体)

坂井市社会福祉協議会

こども食堂・まちづくり協議会

認定NPO法人芸術と遊び創造協会（東京おもちゃ美術館）

 **孤独・孤立** 対策
官民連携プラットフォーム

わたしたちは、孤独・孤立対策に係る取組、又は活動への協力や支援をしております。

 認定NPO法人 全国こども食堂支援センター
むすびえ

■ 事業名

「こども食堂での文化プログラム体験を通じた多世代間の交流促進事業」

■ 事業概要

少子高齢化、コミュニティの弱体化、町村合併により地域の支え合い力が低下、子どもや子育て世帯、高齢者の孤立等が進んでおり、状況は、福井県坂井市でも課題となっている。坂井市内のこども食堂において、絵手紙教室や昔遊び等を実施し、地域住民に出番をつくるとともに、これまで関わりがあまりなかった新興住宅と旧村部等との繋がり機会とし、地域の人と人との「ゆるやかな」つながりを築けるような場づくりを行う。

■ 実施団体

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ（本事業受託団体）

社会福祉法人坂井市社会福祉協議会（連携団体）

こども食堂・まちづくり協議会（連携団体）

認定NPO法人芸術と遊び創造協会（連携団体）

■ 課題

坂井市は4つの地区が合併し、現在は約9万人の人口規模であるが、新興住宅地と旧村部、旧地域住民同士の知り合う機会が少ない等地域住民のつながりの希薄さ、孤立化が課題となっている。

■ 事業内容・狙い

本事業では、当団体と分野を超えた居場所の包括連携事業を協働している坂井市社会福祉協議会との連携において市内のこども食堂を拠点に、地域活動者や自治会、民生委員、まちづくり協議会等との協働を促進し、絵手紙教室や昔あそびなどの文化プログラム体験の提供を行う。また、主たる拠点となるこども食堂は、元社会福祉協議会職員/民生委員が運営する食堂のため、課題を抱える人の早期発見の視点も持ち合わせており、地域特性や実情も踏まえてそれを可能とするポテンシャルがあるだけでなく、近隣には学校、学童、コミュニティセンターが隣接するエリアで、文化プログラム体験をイベント的に実施することで、地域住民への発信・告知を強化することができるだけでなく、地域住民の出番や関わり合いを創出し、新たな住民とのつながりの機会も生み出す（孤独・孤立の予防）。また、絵手紙教室やけん玉やこま回し、お手玉などの昔あそび等のプログラムは表現したり工夫したりすることを楽しみながら、季節や文化への理解を深めるだけでなく、手や道具を使って遊ぶものが多く、多世代で一緒に取組みやすいため、「教えられたり」「教わったり」「褒められたり」「手伝ってもらったり」「感性にふれたり」などの関わり合いとコミュニケーションがはかりやすいため、日常生活での困り事や身体能力等の低下に気づける機会にもなる（早期発見につながる）。さらには、文化プログラムは、特別な資格等が不要で、地域の多様な主体が取組みやすく、多様な主体の参加や協働をすすめることで継続的な活動にしやすいため、日常生活における孤独・孤立の予防や早期対策につながる活動の持続性を高めやすい。そして、参加者と地域とのつながりや変化等に関する定量的な調査を実施し、全国的な調査等と比較し考察することで、より多くのこども食堂や地域の居場所づくりを促し、運営にも役立てていくことを目指し、本事業の波及効果も狙う。

スケジュールと実施における工夫点

■ スケジュール

日付	内容
8月	<ul style="list-style-type: none">シンボルマーク&チラシの作成。おもちゃとコンサルタントの派遣手配。坂井市社協、こども食堂、おもちゃ美術館、JFRA、むすびえの事前打合せ
8月5日（土）	<ul style="list-style-type: none">むすびえ本事業責任者が大関こども食堂を訪問。 施設の状況や地域資源についてのヒアリング、ボランティアへの事業説明を行った他、代表者や社協スタッフとの打合せ、アンケート内容についての具体的な相談を行う。
9月	<ul style="list-style-type: none">広報・告知の準備（チラシの印刷・配布） 配布先は、開催予定場所の隣にある大関小学校（学校の先生よりこどもたちにチラシを配布） 地域全体（大関地区。836世帯。全戸配布） 地区の老人クラブ（坂井市社協より配布）、保育園（大関こども食堂の運営者による訪問）、郵便局（坂井市社協より配布）
10月7日（土）	<ul style="list-style-type: none">1回目 文化プログラム体験活動の実施日本ファンドレイジング協会による、運営者・参加者等へヒアリング及びアンケート調査。（東京おもちゃ美術館の山田、日本ファンドレイジング協会の鴨崎、むすびえより三島、佐藤の計4名が現地入り）
11月4日（土）	<ul style="list-style-type: none">2回目 文化プログラム体験活動の実施 参加者へのアンケート調査。（坂井市社会福祉協議会職員3名が開催サポート）
12月2日（土）	<ul style="list-style-type: none">3回目 文化プログラム体験活動の実施 日本ファンドレイジング協会による運営者・参加者等へヒアリング及びアンケート調査。運営者・ボランティアのグループインタビュー。（日本ファンドレイジング協会の鴨崎、むすびえより三島の計2名が現地入り）
2月10日（土）	<ul style="list-style-type: none">大関こども食堂文化プログラム実施共有会@坂井市



スケジュールと実施における工夫点

■ 工夫点

①周知

地域住民に広く知ってもらうために、シンボルマーク・チラシを作成し、他団体（まちづくり協議会や保育園等）との連携で情報発信。

②運営者・ボランティアへの目的の共有

事前の説明や現場での会話を通じて本プログラムへの理解を促進。ボランティア等の巻き込みや周知協力などを意識。

③中間支援団体によるコーディネート

地域活動団体（地域資源）を知る社会福祉協議会にコーディネーターになってもらうことで、地域資源の連携を促進

箱番	地区名	行政区名	各戸配布数	(内)予備	デジタル配布	回覧数	ポスター数
32	大 関 地 区	館	30	2		5	2
33		小路	18	0		3	1
34		関中	24	1		4	1
35		安光	13	1		1	1
36		上関	46	0		5	1
37		島田	23	0		4	1
38		大関大正	49	1		4	1
39		東	42	1		4	1
40		下蔵	24	2		3	1
41		上蔵	16	1		4	1
42		南蔵垣内	30	1		1	1
43		鯉	11	1		1	1
44		西	36	2		4	1
45		東中野	13	0		2	1
46		新東中野	142	5		8	1
47		大味上	40	1		4	1
48		大味中	21	0		1	1
49		大味下	35	2		4	1
50		新大味	38	0		2	1
51		花の町1丁目	60	2		4	1
52		花のまち2丁目	55	0		3	1
53		大味春日	70	0		3	1
地区計	22	836	23	0	74	23	

9月臨時号 **友遊**
大関コミュニティセンターだより

大関コミュニティセンター
坂井市坂井町東 12-5-1
TEL: 1957 Fax: 72-1935
2023年9月14日発行

#みんなで食べると、 おいしいね。



子ども食堂 **こども食堂**

大関居場所づくり

～みんないっしょに～

地域の方みんなと繋がりをもちたくて居場所づくりをしています。
一緒に食事をする事で知り合い仲良くなれる事が目的です。
どなたでも参加できますのでお越しください。
みなさんと会えることをボランティア同様に楽しんでいます。

※1月は休く

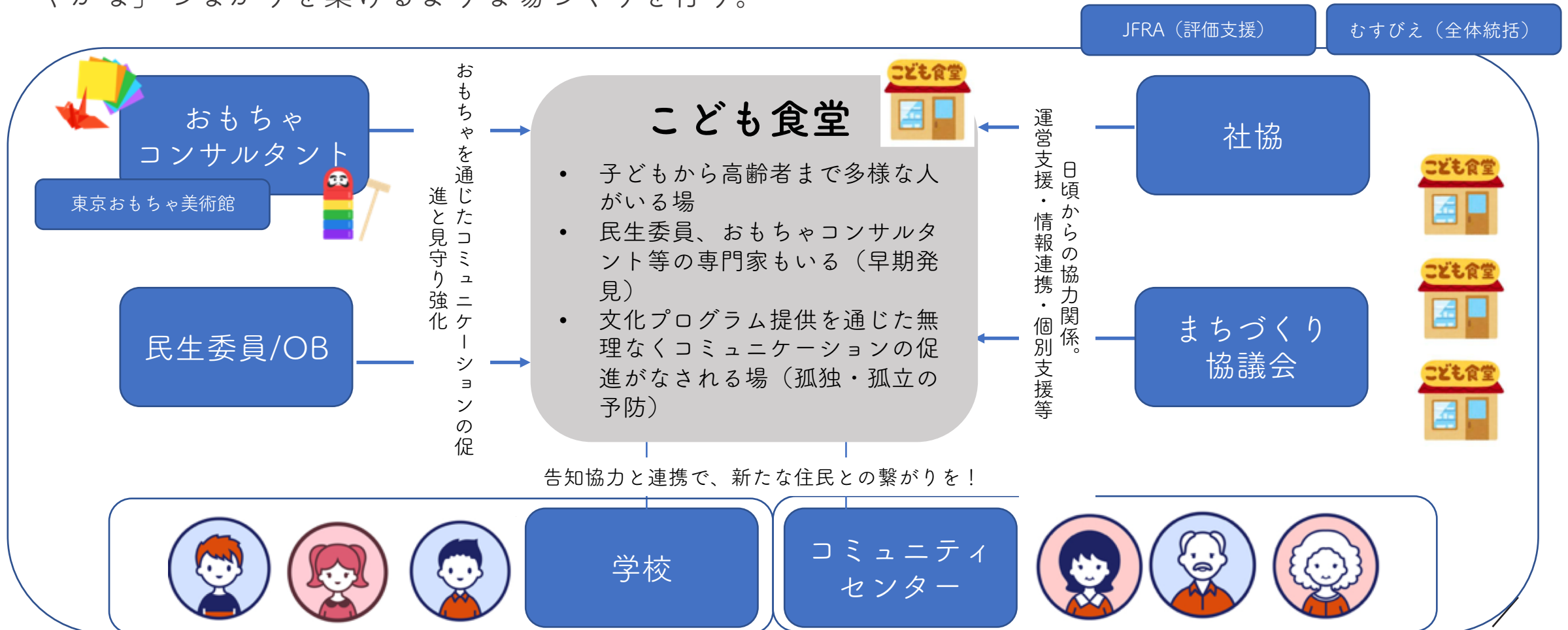
日時	毎月第1土曜日 11:00～13:00 子供達はその後、児童館で遊べます	対象者	大関地区全員 地区外の方相談にのります
場所	大関コミュニティセンター	食事代	子供 100円 大人 200円

主催：大関居場所づくり～みんないっしょに～ 協力：認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・むすびえ / 社会福祉法人坂井市社会福祉協議会

問合せ：72-1811 (虎尾)

本事業の全体像

坂井市内の子ども食堂において、絵手紙教室や昔遊び等を実施し、地域住民に出番をつくるとともに、これまで関わりがあまりなかった新興住宅と旧村部等との繋がり創出し、地域の人と人との「ゆるやかな」つながりを築けるような場づくりを行う。



調査概要及び事業結果（アウトプット）



■調査概要

参加者層	大関地区全住民対象 ※3回とも共通
提供プログラム	食事の提供及び文化プログラム体験活動（おもちゃ美術館と協働）
実施日	2023年10月7日、2023年11月4日、2023年12月2日（事前現場打ち合わせ2023年8月5日）
参加者アンケート	各回で実施
運営者アンケート、インタビュー	3回目にまとめて実施、インタビューは1回目、3回目に実施

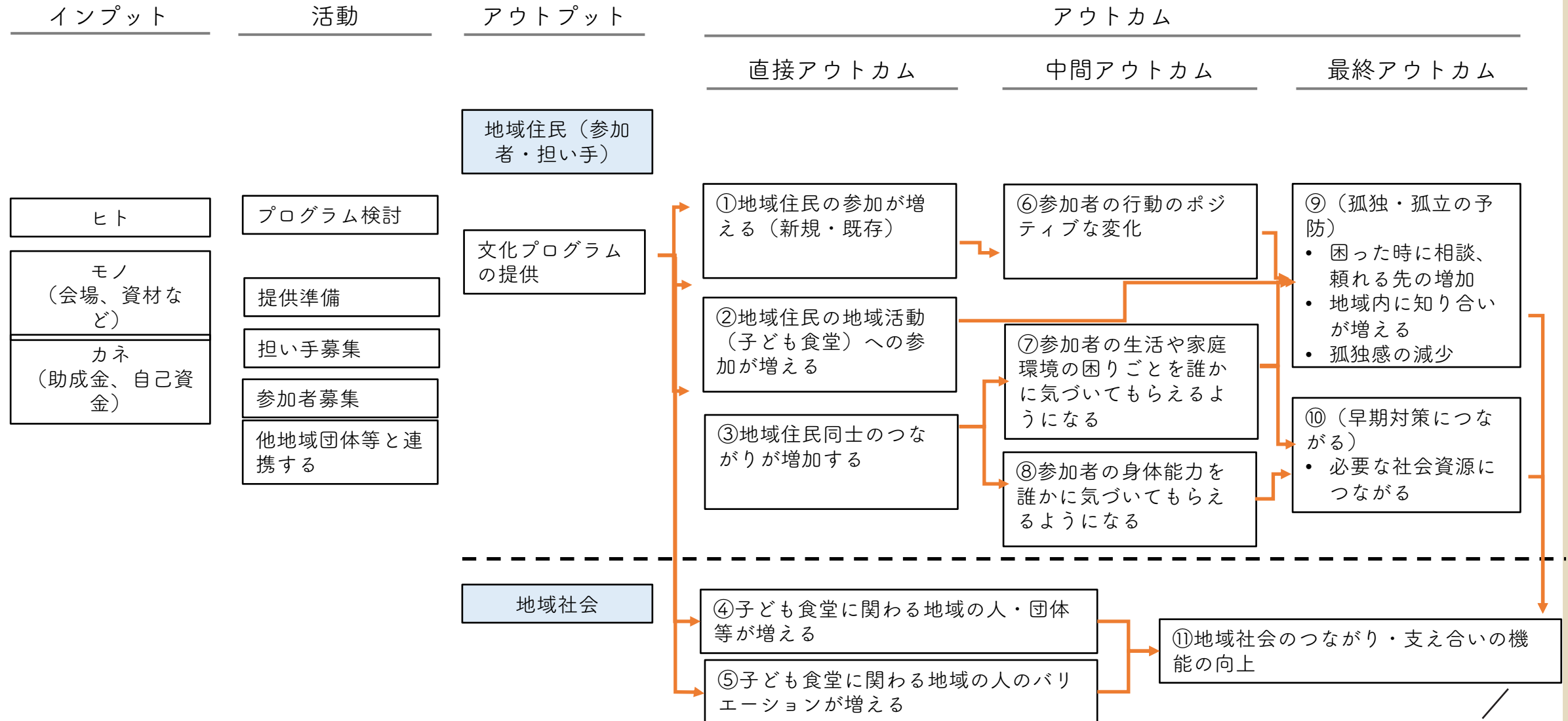
■事業結果（アウトプット、アウトカム①、②、④、⑤）

参加者数	1回目 (2023年10月7日)	参加者数（調査対象）	65名（ボランティア除く）
		参加者アンケート回収数（率）	31名（47%）
		担い手参加者数	食堂ボランティア18名、おもちゃ学芸員5名
	2回目 (2023年11月4日)	参加者数（調査対象）	63名（ボランティア除く）
		参加者アンケート回収数（率）	40名（63%）
		担い手参加者数	食堂ボランティア17名、おもちゃ学芸員（5名）
	3回目 (2023年12月2日)	参加者数（調査対象）	78名
		参加者アンケート回収数（率）	28人（36%）
		担い手参加者数	食堂ボランティア18名、おもちゃ学芸員（5名）
		担い手アンケート回収数（率）	13人（72%） * こども食堂ボランティアのみ

（ヒアリングより）本プログラムのチラシを全戸に配布したことにより、近隣の保育園の他、老人クラブからも初参加（3名）があった。毎回約100人の参加があり、通常より2割程度、参加者が多く、年代も多様になった。

また、担い手いに関しては、こども食堂ボランティアの数に変化はないが、文化プログラムの提供に関して新たに東京おもちゃ美術館との連携がスタートし、毎回5名のおもちゃ学芸員が参加した。

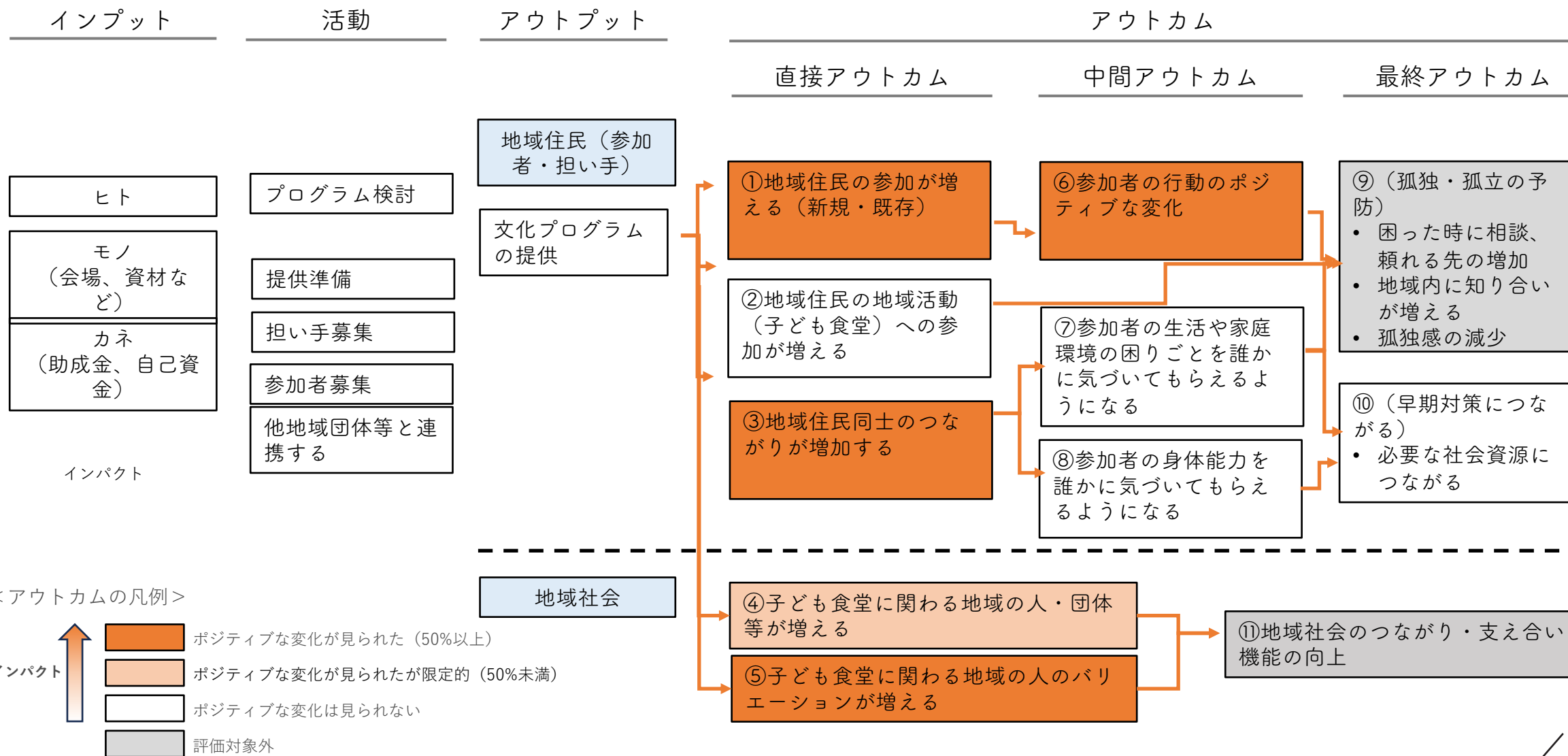
ロジックモデル



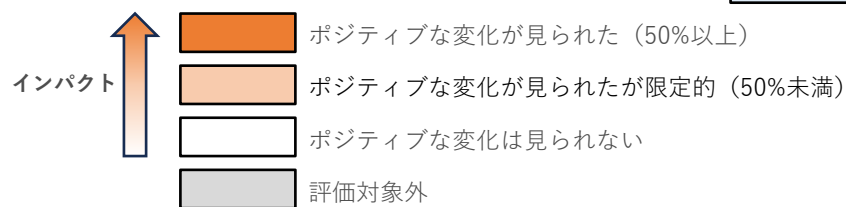
評価モデル

種別	内容	指標	測定方法
アウト プット	文化プログラムの提供	プログラム提供回数（開催回数、プログラム数）	実数を測定
		担い手の数	実数を測定
		参加者数	実数を測定
直接ア ウトカ ム	①地域住民の参加が増える（新規・既存）	<新規> ・新規参加者数 ・今後の参加意向	参加者アンケート
		<既存> ・参加回数 ・今後の参加意向	参加者アンケート
	②地域活動（子ども食堂）への参加機会が増える	担い手の数、参加回数	担い手の参加記録を確認
	③地域住民同士のつながりが増加する	知人の数	アンケート調査
	④子ども食堂に関わる地域の人・団体等が増える	担い手及びその他の役割で関わる人の数、連携先の数	関わる人の数、関わり方を調査
⑤子ども食堂に参加する地域の人の変種が増える	子ども食堂に参加する地域の人の変種（年齢層、居住地域、など）	関わる人の変種を調査（申込情報から）	
中間ア ウトカ ム	⑥参加者の行動のポジティブな変化	・笑顔を見せた参加者の数/割合 ・感謝の気持ちを伝える参加者の数/割合 ・参加者同士で会話をする人の数/割合、時間 など	運営者、担い手にアンケート又はヒアリング調査
	⑦参加者の生活や家庭環境の困りごとを誰かに気づいてもらえるようになる	困りごとに気づいた件数、内容	担い手へのアンケート又はヒアリング調査
	⑧参加者の身体能力を誰かに気づいてもらえるようになる	気づきの件数、内容	担い手へのアンケート又はヒアリング調査
最終ア ウトカ ム	⑨（孤独・孤立の予防） ・ 困った時に相談、頼れる先の増加 ・ 地域内に知り合いが増える ・ 孤独感の減少	—	* 本プログラムとの因果関係の証明が難しいので、測定対象外にする
	⑩（早期対策につながる） ・ 必要な社会資源につながる	・ 必要な社会資源につながった件数、内容 ・ 解決された課題等の件数、内容	運営者、担い手にアンケート又はヒアリング調査
	⑪地域社会のつながり・支え合いの機能の向上	—	* 本プログラムとの因果関係の証明が難しいので、測定対象外にする

評価結果サマリー



<アウトカムの凡例>



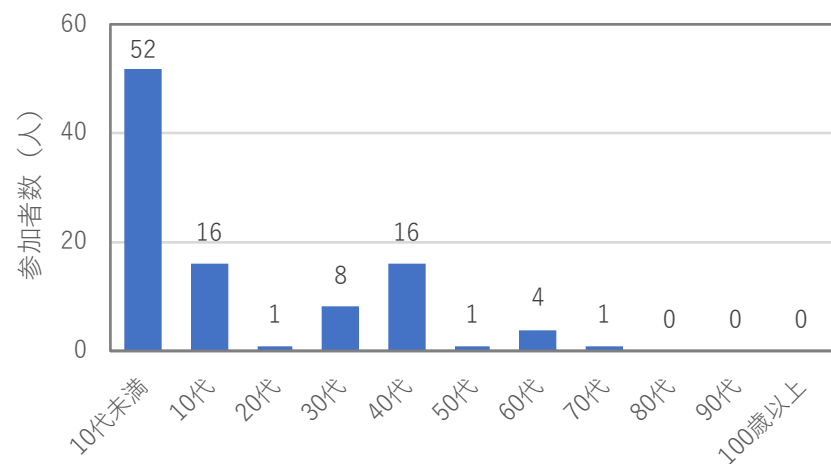
評価結果（詳細）

【参加者の年齢分布（アウトカム⑤）】参加者の年齢は10代未満、10代の子どもとその親世代（30代、40代）が大部分を占めるが、60-70代のシニア層の参加者もいることがわかる。

年齢	10月	11月	12月	合計	割合 (%)
10代未満	16	19	17	52	53%
10代	7	5	4	16	16%
20代	0	1	0	1	1%
30代	3	3	2	8	8%
40代	5	6	5	16	16%
50代	0	1	0	1	1%
60代	0	4	0	4	4%
70代	0	1	0	1	1%
80代	0	0	0	0	0%
90代	0	0	0	0	0%
100歳以上	0	0	0	0	0%
回答人数 (n)	31	40	28	99	100%

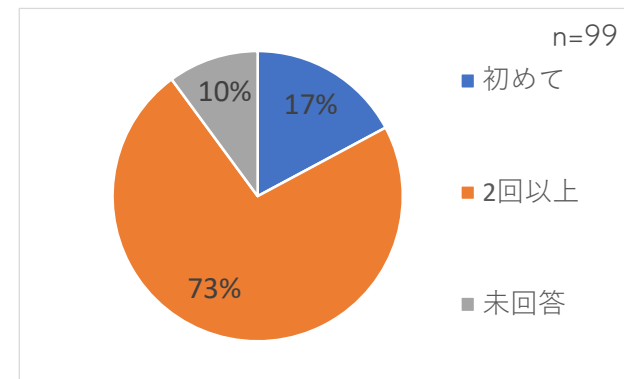
69%

24%



【子ども食堂への参加回数（アウトカム①）】参加者の子ども食堂への参加回数は、2回以上の割合が多いが、今回初めて参加する人も一定割合いることがわかる。

属性	回数				割合 (%)
	10月	11月	12月	合計	
初めて	6	1	10	17	17%
2回以上	24	32	16	72	73%
2回	13	3	1	17	17%
3回	7	1	1	9	9%
4回	1	0	0	1	1%
5回	1	4	0	5	5%
6回	0	1	0	1	1%
9回	0	0	1	1	1%
10回	0	2	2	4	4%
12回	2	0	2	4	4%
無回答	1	7	2	10	10%
回答人数 (n)	31	40	28	99	100%



評価結果（詳細）

【参加理由（アウトカム①）】参加理由は、文化プログラムへの興味が最も多く、次いで食事の提供が多い。前問の参加回数と合わせて考えると、文化プログラムの実施が新規の参加者獲得と複数回参加者（リピーター）獲得に寄与していることがうかがえる。

（設問）参加しようと思った理由について、あてはまるものすべてに○印をおつけください。（複数回答可）

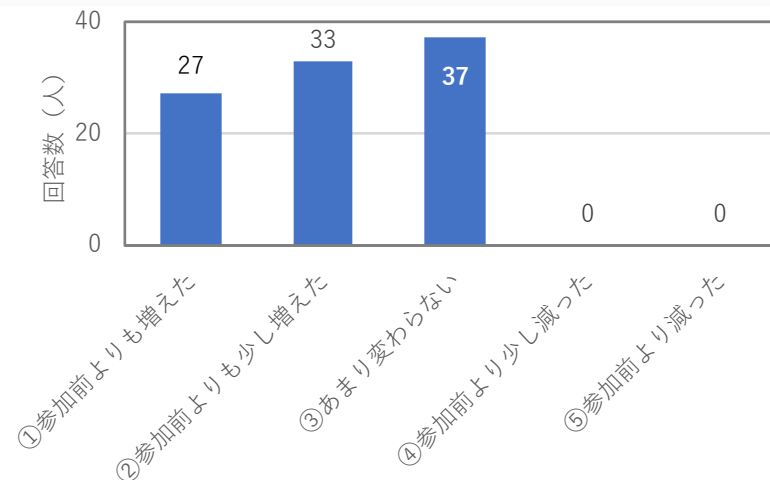
選択肢	10月	11月	12月	合計	割合(%) (n=99)
①食事を提供してもらえるから	9	20	12	41	41%
②文化プログラムが面白そうだったから	20	12	11	43	43%
③地域の人に会えるから	8	14	6	28	28%
④チラシをもらったから	2	2	13	17	17%
⑤家族や近所の人に誘われたから	1	5	1	7	7%
⑥その他	2	1	1	4	4%

【地域住民同士のつながりの変化（アウトカム③）】こども食堂の参加前後で、参加者の61%が地域内の知り合いが増えたと回答している（①、②合計）。こども食堂及び文化プログラムの実施は地域住民同士のつながりの増加に寄与しているといえる。

（設問）こども食堂等に参加する前と比べて地域内の知り合いの数に変化はありましたか？あてはまるもの1つに○印をおつけください。

選択肢	10月	11月	12月	合計	割合(%)
①参加前よりも増えた	6	13	8	27	27%
②参加前よりも少し増えた	15	12	6	33	33%
③あまり変わらない	8	15	14	37	37%
④参加前より少し減った	0	0	0	0	0%
⑤参加前より減った	0	0	0	0	0%
無回答	2	0	0	2	2%
回答人数 (n)	31	40	28	99	100%

61%

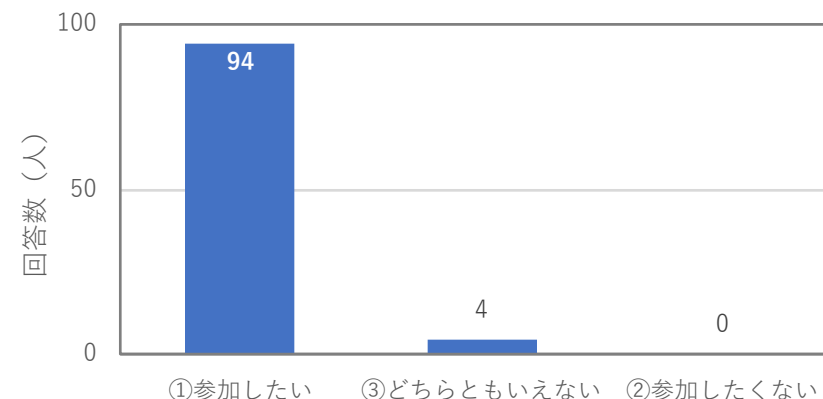


評価結果（詳細）

【今後の参加意向（アウトカム①）】参加者の9割以上が今後も参加したいと回答している。次問の結果と合わせて考えると、文化プログラムの実施は居場所への参加の継続率向上に寄与しているといえる。

（設問）今後もこども食堂に参加したいと思いますか？あてはまるもの1つに○印をおつけください。

選択肢	10月	11月	12月	合計	割合(%)
①参加したい	29	37	28	94	95%
②参加したくない	0	0	0	0	0%
③どちらともいえない	2	2	0	4	4%
無回答	0	1	0	1	1%
回答人数 (n)	31	40	28	99	100%



【参加したい理由（アウトカム①）】前問で「今後も参加したい」と回答した参加者にその理由を尋ねたところ、食事、文化プログラム、地域の人とのつながりがそれぞれ一定以上の割合を占めた。前問の今後の参加意向と合わせて考えると、通常のこども食堂の食事や地域の人とつながる楽しみに加え、文化プログラムの実施による参加者の継続率向上が期待できる。

（設問）前問でそのように答えた（参加したい）理由について、あてはまるものすべてに○印をおつけください。（複数回答可）

選択肢	10月	11月	12月	合計	割合 (%)
①食事を提供してもらえるから	10	21	15	46	49%
②文化プログラム（おもちゃ遊び）が楽しかったから	19	14	12	45	48%
③地域の人とつながることができるから	12	18	8	38	40%
④その他	1	0	4	5	5%
回答人数 (n)	29	37	28	94	100%

評価結果（詳細）

【参加理由（アウトカム①）】 *参加回数別の参加理由分析

参加理由について、参加回数別にみると「初めて」の参加者は文化プログラムへの興味以外に「チラシをもらったから」が多く、「2回以上」の参加者は食事の提供や地域の人に会えることが多い。この結果から新規の参加者獲得に今回実施したチラシの全戸配布が効果があったことがわかる他、食事の内容の満足感の高さや地域の人とのつながりを求めてリピーターが参加している様子うかがえる。

選択肢	10月			11月			12月			合計				
	初めて	2回以上	未回答	初めて	2回以上	未回答	初めて	2回以上	未回答	初めて	割合 n=17	2回以上	割合 n=72	未回答
①食事を提供してもらえるから	1	8	0	1	14	5	2	8	2	4	24%	30	42%	7
②文化プログラムが面白そうだったから	4	15	1	0	8	4	4	7	0	8	47%	30	42%	5
③地域の人に会えるから	3	5	0	0	13	1	1	4	1	4	24%	22	31%	2
④チラシをもらったから	0	2	0	0	2	0	7	5	1	7	41%	9	13%	1
⑤家族や近所の人に誘われたから	0	0	1	0	4	1	0	1	0	0	0%	5	7%	2
⑥その他	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0%	3	4%	0

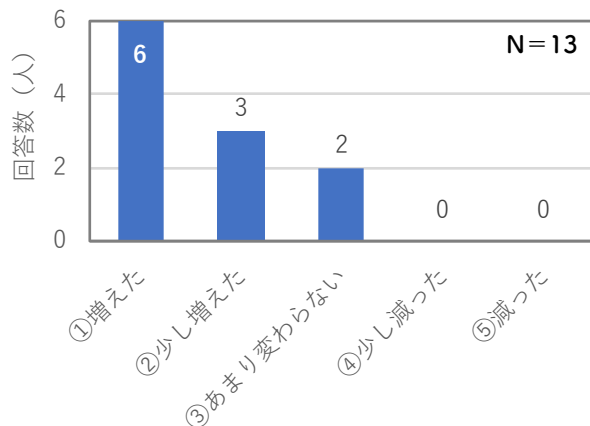
評価（詳細）

【参加者の行動のポジティブな変化（アウトカム⑥）】運営者の7-8割が参加者の行動にポジティブな変化が各項目（笑顔を見せる、運営者などに感謝の気持ちを伝える、参加者同士の会話の増加）で見られたと回答している（①、②合計）。文化プログラムの実施は参加者の行動のポジティブな変化に寄与しているといえる。

文化プログラムを導入する前と比べて、笑顔を見せる参加者の数や割合に変化はありましたか？

選択肢	回答数
①導入前よりも増えた	6
②導入前よりも少し増えた	3
③あまり変わらない	2
④導入前よりも少し減った	0
⑤導入前よりも減った	0
⑥無回答	2

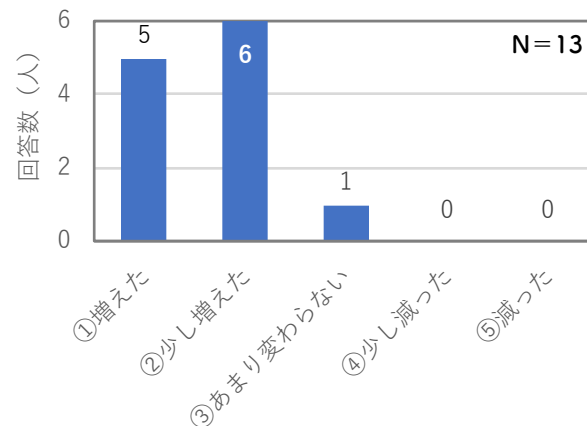
69%



文化プログラムを導入する前と比べて、運営者や担い手に感謝の気持ちを伝える参加者の数や割合に変化はありましたか？

選択肢	回答数
①導入前よりも増えた	5
②導入前よりも少し増えた	6
③あまり変わらない	1
④導入前よりも少し減った	0
⑤導入前よりも減った	0
⑥無回答	1

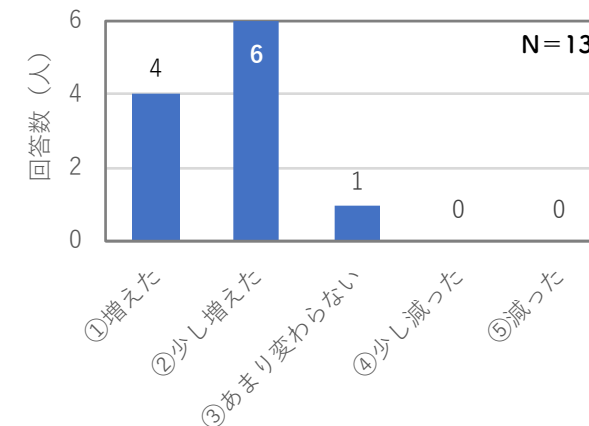
85%



文化プログラムを導入する前と比べて、参加者同士で会話をする人の数や割合に変化はありましたか？

選択肢	回答数
①導入前よりも増えた	4
②導入前よりも少し増えた	6
③あまり変わらない	1
④導入前よりも少し減った	0
⑤導入前よりも減った	0
⑥無回答	2

85%



参加した感想（抜粋）

参加者の感想から、文化プログラムの導入により、普段とは違うこどもの一面を引き出したり、こども同士、こどもと大人、大人同士の交流を促進している様子がうかがえる。

- こどもが飛び跳ねて、全身で喜ぶ姿を久しぶりに見た（ヒアリングより）
- 初めての人同士でも、おもちゃを通して一緒に遊べた（ヒアリングより）
- こども同士だけではなく、こどもと大人、大人同士でも一緒に遊べた（ヒアリングより）
- 色々なおもちゃがあって子どもが楽しめました（30代）
- お友達とたくさん遊べるし、一緒にごはんを食べれて楽しそう良かった（40代、3回）
- 皆さん楽しそう。また参加したい！（30代、初回）
- 地域の人が仲良い感じがとても楽しくなりました（40代、初回）
- 子供たちが集まれる場所だから。子供会などのコミュニティが減ってきていて、こういう機会は貴重だと思います（40代、初回）

参加者の困りごと等への気づき、早期対策につながる（アウトカム⑦、⑧、⑩）

文化プログラム（おもちゃ遊び）をしながらゆっくり話す時間ができることで、参加者の様々な状況へ気づく可能性が高まること示唆された。しかし、食事提供後に文化プログラム体験に参加できずに帰るボランティアも多くいることから、困りごとの相談や早期対策につながる事例は今回の調査期間中は確認できなかった。

- 子どもと遊んでいる時、昔、父親から暴力を受けて学校等に相談したことがあると話す子がいた。父親とはその後、良好な関係になっているようではあるが。（ヒアリングより）
- 毎回ボランティアで近所で気になる方（独居貧困等々にこだわらない）に弁当として配食している中で変化があった際、社協、区長、ボランティア、近所の方で対応した。（70代、参加回数35回以上）
- まだ困りごとの相談まではいかない。（ヒアリングより）

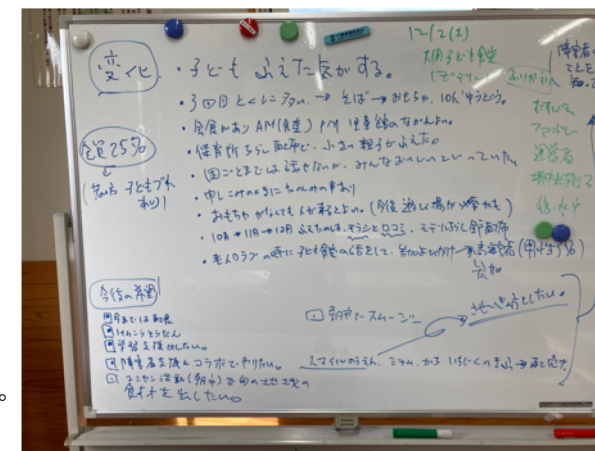
グループインタビュー（こども食堂運営者・ボランティア）

こども食堂運営者/ボランティアの生きがい、居場所にもなっていることがうかがえる。また、地域住民とのつながる機会にもなっている。

- 10月から保育園にもチラシを配布し始めたので、若いお母さんたちが多くくるようになった
- 困りごとの相談まではいかない。
- 毎月の開催が楽しみという申込欄に記載がある
- 人が増えると遊ぶ場所がないと、困る。
- チラシだけではなくて、クチコミで参加者が増えている
- **老人クラブの会で、高齢者がくるきっかけになった。次もまたくると行って帰られた。**
- 子どもだけでなく、助け合う関係づくりをしていきたい。どなたでも。
- 今後やりたいこと（みんなで一緒にやる、健康相談（資格を持っているボランティアがいる）、学習支援（場所はここがよいか、どうか）、障害者施設とのコラボ、朝イチの食材を子どもたちに出したい。）
- 障害があるひとが特別視されないような地域の関係づくりをしたい。柿がたくさんできるが食べないからジャムにして、みんなで配った。
- **自分が引きこもりがちなので、ここに来るのが楽しい**
- おいしかった、ありがとうと言われるとうれしい
- 知らない子と顔見知りになると嬉しい。
- 大きい子もきてくれる。自分で自転車できてくれる。
- ボランティアの皆さんと話せるのが嬉しい
- 男性ボランティアがきてくれるのがうれしい。華やかになる。
- 男の人はいい格好しい。料理以外のボランティアをしてもらって欲しい。調理への苦手意識がある。
- 調理のやり方に気づきがある。こういうやり方がわかるのが嬉しい。
- こども食堂で、自分の子どもの同級生が、お父さんになって子どもを連れてきてくれていて、それが嬉しい
- 地域の人が出てきて、顔が覚えられる。誰が住んでいるのかを知ることがない。
- **ここがなかったら地域の人を知る機会がない。**
- 刺激になる。仕事をやめると刺激になるし、分野の違う人たちと知り合いになる。自分のためにもなるし、何かのためにもなる。
- **大関地区の人たちと話しやすくなったりする。それが一番の収穫。**
- 地域のイベントで、声をかけてもらえるようになった。いろんなつながりができる。
- 子どもの笑顔をみれて、嬉しい。仕事をやめると行動範囲が狭くなる。引きこもりがちになるが、みんなと一緒に、最低3回は会うので、話し合いの時間を共有していて、**自分たちの居場所にもなっている。**生活上の刺激にもなっている。試行錯誤だけれど、おいしかった。楽しかったと言われるので、ずっと続けていけたら
- 孫がないので、小さいこどもの顔が見れるのが楽しみ。**メニューを決めるのが大変だけれど、何にしようかというのが楽しみでもある。**仲間の話し合い

2023年12月2日

こども運営者・ボランティア12名に対してグループインタビューを実施。



グループインタビュー終了後、代表者がボランティアみんなの気持ちが知れて、「今日が一番嬉しかった日」と言われた。また、後日、有志メンバーで広島のこども食堂を訪問し、学び合いと交流を行った他、事業期間中に2名のボランティアが、自らこども食堂やフードパントリー活動を実施する意向を示した。現在、開催に向けて、坂井市社協が伴走支援を行っている。

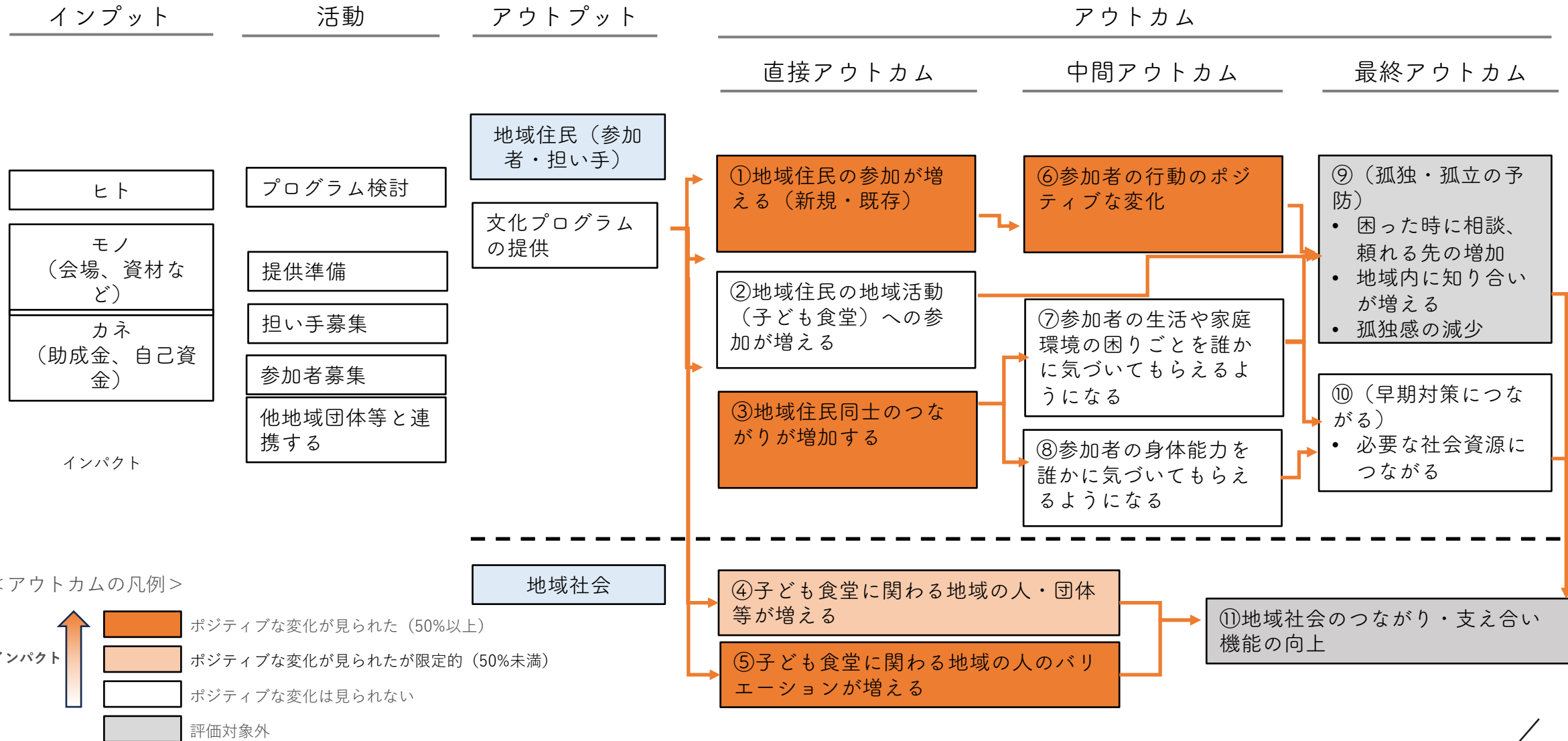
■ 評価結果まとめ

- 文化プログラムの実施が新規の参加者獲得と複数回参加者（リピーター）獲得に寄与していることがうかがえる。（アウトカム①）また、運営者ヒアリングからも参加者が通常のこども食堂より2割程度多く、また年代も多様になったことが確認できた。（アウトカム①、⑤）
- 文化プログラムの実施は居場所への参加の継続率向上に寄与しているといえる。（アウトカム①）
- こども食堂及び文化プログラムの実施は地域住民同士のつながりの増加に寄与しているといえる。（アウトカム③）
- 文化プログラムの実施は参加者の行動のポジティブな変化（笑顔を見せる、運営者などに感謝の気持ちを伝える、参加者同士の会話の増加）に寄与しているといえる。（アウトカム⑥）
- 担い手に関しては、こども食堂ボランティアの数に変化はなかったが（アウトカム②）、文化プログラムの提供に関して新たに東京おもちゃ美術館との連携がスタートし、おもちゃ学芸員が新たな担い手として参加した。（アウトカム④）
- 文化プログラム（おもちゃ遊び）をしながらゆっくり話す時間ができることで、参加者の様々な状況へ気づく可能性が高まること示唆された。しかし、食事提供後に文化プログラム体験に参加できずに帰るボランティアも多くいることから、困りごとの相談や早期対策につながる事例は今回の調査期間中は確認できなかった。（アウトカム⑦、⑧、⑩）
- 以上より、本事業の最終アウトカムである「孤独・孤立の予防」「早期対策」「地域社会のつながり・支え合い機能の向上」のような成果は事業期間が短いなどの制約要因があり確認できなかったが、それらのアウトカムにつながる変化（成果）が直接アウトカムを中心に確認された。したがって、文化プログラムをこども食堂に組み入れることで、将来的に上記最終アウトカムの発現が期待できる。

■ 留意点

- 参加者アンケートの回収率が高くない回もあるため、結果に偏りが出ている可能性がある点に留意する。

評価結果サマリー（再掲）



■ <総論>多世代交流拠点としてのこども食堂×文化プログラムの可能性

- こども食堂は、参加に条件を設けていないところが約8割にのぼり、実際63.5%のこども食堂に高齢者も参加するなど、多世代交流拠点として全国に広がっている。本事業は、多世代交流拠点として広がるこども食堂において、年齢や障がいがあるないにかかわらず、柔軟にやり方を工夫できる「文化プログラム」を行うことで、より多くの地域住民からの参加と交流促進を狙っていたが、事業評価からも一定以上の成果が明らかになったことは、今後のこども食堂の活動の多様化、参加者・担い手の裾野の広がりにつながる可能性を秘めていると言えるだろう。

■ <主なポイント>参加者の裾野の拡大に向けて。チラシ配布と声かけ。

- 告知においては、まちづくり協議会を通じたチラシの全戸配布や保育園等からの案内をした結果、幼児や高齢者等の参加の裾野が広がった。また、食事の内容の満足感の高さや地域の人との繋がりを求めてリピーター（継続）が参加している様子がわかった。
- 今回、3回目の開催において、初参加の高齢者の参加があったが、対象地域の老人会の活動はなくなってしまっていた地域だったが、こども食堂でボランティアするメンバーが、老人クラブを立ち上げ、活動を継続している。今回、こども食堂で食材の配布だけでなく、会食と文化プログラムの提供を行うため、老人クラブでも告知。本企画は、全戸配布でチラシを配布していたことに加えて、老人クラブでも声をかけられたことから、老人クラブの仲間3人で、初めてこども食堂に参加した。参加者へのインタビューで、「近所でこんな活動をしていることは知らなかった」と話し、終始にこやかに話され、次やる時も参加したいと言い、帰って行かれた。
- 老人クラブをやるこども食堂ボランティアにインタビューをしたところ「お一人暮らしの少し認知症が始まった方。引きこもりがちになるので、声をかけた」と話してくれた。

今後の展開

■ こども食堂における事業評価の可能性とエンパワメント

- こども食堂は、全国の公立中学校と義務教育学校の数を合わせた9,296か所とほぼ同数の9,131箇所までに増加していることが明らかとなっている。（当団体2023年12月発表。前年比1,768か所の増加）そして、推計で参加者数はのべ1,584万人（内、こどもの参加者数は1,091万人）にのぼる。それらのこども食堂は、運営者やボランティアの思いを軸にして、全国でボランティア活動の実践がなされている。それゆえに、活動形態や内容は多様であり、ボランティア活動ゆえ、これまで事業（活動）を評価すること自体あまり注視されてこられなかった。
- 本事業では、短期間ではあったが、こども食堂が孤独・孤立対策として、地域住民及び地域社会にどのような変化をもたらすのかを明らかにする取り組みとして計画され、①地域住民の参加が増える（新規・既存）、③地域住民同士のつながりが増加する、④子ども食堂に関わる地域の人・団体等が増える、⑤子ども食堂に関わる地域の人へのバリエーションが増える、⑥参加者の行動のポジティブな変化が本事業評価で定量・定性面から明らかにすることができたこと自体が、今後、他拠点・地域での事業評価の展開や多面的なこども食堂がもたらす価値の可視化への発展を展望することができる。
- また、全国に増加するこども食堂ではあるが、市内・町内で運営者同士の交流や情報交換がなされるまでには至っていない地域がほとんどであり、運営者は孤立しがちである。そのため、事業評価を行うことで、こども食堂運営者・ボランティアをエンパワメントと活動の振り返りにつなげたことは、こども食堂の継続性や新たな展開への発展性を包含するだろう。

■ 中間支援組織の役割の重要性や重層的支援体制整備事業との連携可能性

- 本事業では、坂井市社会福祉協議会が、こども食堂の運営相談や事業評価のサポートを行なった。
- 上述した通り、こども食堂実践者は、思いを持って活動をするものの、困りごとの相談を身近にできる人が必ずしもいるわけではない。また、ボランティアが自ら地域活動を主宰するなどへの意欲を示した際に相談先があるかどうか、新たな地域活動に広がっていくためには、重要である。そして、その相談先は、自治会やまちづくり協議会、公民館等の地域活動団体や地域資源を知っていることで、新たな活動に必要な情報や人的リソース等の具体的なサポートをむすびつけやすい。その点を鑑みると、地域活動者にとって、身近なところに相談できる中間支援組織が存在することの重要性と役割を本事業からも見出すことができる。
- その上で、本事業の連携団体は、厚生労働省が進める地域共生社会の実現を目指す関連事業として「重層的支援体制整備事業」を行っており、地域づくり支援における事業連携/波及効果を期待できるだろう。



■ 継続的な事業実施（評価）を行うことの重要性

- 評価結果のまとめに記載している通り、本事業では、最終アウトカムである「孤独・孤立の予防」「早期対策」「地域社会のつながり・支え合い機能の向上」のような成果は事業期間が短いなどの制約要因があり確認できなかったが、それらのアウトカムにつながる変化（成果）が直接アウトカムを中心に確認された。
- そのため、本事業を継続的に実施することによって、「孤独・孤立の予防」「早期発見」「地域社会のつながり・支え合い機能の向上」を実証できる事業または、その実現に向けた示唆を得ることができると考えている。
- 現在、坂井市社会福祉協議会とは、継続的な事業展開の相談と協議を始めており、複数拠点等での事業評価を含む事業を行うことで、孤独・孤立対策としてのこども食堂と文化プログラム提供を軸としたプログラム（企画）化が可能になりうると考えている。その際、行政との事業連携も追求するために、事業評価/結果への関心と他事業への接続や波及を意識したテーマや分野設定についても協議をしているところである。

① みんなでつくって



② 配膳して



③ みんなで食べて



③ みんなで遊ぶ



夏休みの宿題

大関居場所づくり

～みんないっしょに～

スタッフにインタビュー

Q1 なにこの活動をお始めたんですか？
A1 コロナで塾生が休校してニュースなどを聞き、みんなに何かできることはないかと思って、配給の始めた

Q2 どんな活動内容ですか？
A2 まずは最初メニューを決める。
小学校近くはるチラシを作る。
メインのメンバーで食材を準備する。
当日、調理して料理を作る。

Q3 メニューはどのように決めていますか？
A3 子どもたちにアンケートをとったりリクエストを聞いて決めています。

Q4 なぜ100円で済んでいるんですか？
A4 低価格で食事を提供するが基本無料だと感じ、100円にしている。

Q5 赤飯にならないんですか？
A5 赤飯にはならない地域の方から野菜やお米をもらっているから

Q6 どんなふうに食材をもらうようになったんですか？子ども食堂も予約おたりの集まる場(たとえば区長会や不登校の会など)で提供した。

Q7 この活動を発信しているのはなぜですか？
A7 ・みんなが笑顔になるから発信されている。
・地域の方や子どもたちが大人になった大関地区にまた帰ってきたいと思っ、てほしいから。
・この叶がたい町にしたいから。

おじいちゃん、おばあちゃんやお父さん、お母さんもぜひ来ててください。

子ども食堂とは？

子ども食堂とは、子どもだけでなく行けるように無料、又は低価格で食事ができる食堂で「地域食堂」や「みんな食堂」という名称のところもあります。子ども食堂は、民間発の自主的・自発的な取り組みで「防災」や「食育」を支援する取り組みが「整」備されてい「ない」にも関わらず、子ども食堂の普及は増え、現在は700か所にもなっています。

大関新聞

8月5日はカレーを作ったよ

お弁当を買った人にインタビュー

Q1 なぜ子ども食堂を利用しているのですか？
A1 メニューがおいしそうというお弁当が食べれるから。

Q2 子ども食堂はどのような存在ですか？
A2 みんなが集まって食べてくれてお弁当を提供してくれるありがたい場所は。

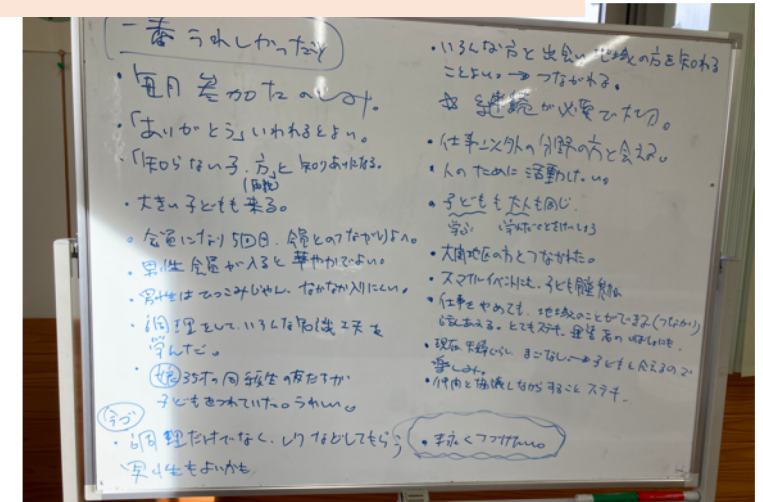
蕎麦打ち活動団体との連携



農家さんからのおすそ分け



最もうれしかったこと



地域住民からの手編みの服



(参考) 多世代交流・地域づくり・まちづくりとしての「こども食堂」



問9 参加者の条件の有無...(SA)

No.	カテゴリー名	n	%
1	参加者について条件を付していない	969	78.4
2	参加者に条件を付している	265	21.4
	無回答	2	0.2
	全体	1236	100.0

問10 参加者の属性...(MA)

No.	カテゴリー名	n	%
1	未就学児	1037	83.9
2	小学生	1190	96.3
3	中学生	961	77.8
4	高校生	671	54.3
5	大学生・専修学校生	430	34.8
6	大人(高齢者は除く)	955	77.3
7	高齢者	775	62.7
8	生活困窮家庭(生活保護・非課税世帯など)	616	49.8
9	ひとり親家庭(児童扶養手当受給世帯など)	784	63.4
10	障害者	462	37.4
11	ひきこもり・不登校	397	32.1
12	外国籍	249	20.1
13	その他	57	4.6
	無回答	3	0.2
	全体	1236	100.0

令和2年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (厚生労働科学特別研究事業) 総括研究報告書「新型コロナウイルス感染症流行下における子ども食堂の運営実態の把握と その効果の検証のための研究」

<https://www.mhlw.go.jp/content/000800261.pdf>



(参考) 多世代交流・地域づくり・まちづくりとしての「こども食堂」

■こども食堂とは

地域食堂、みんなの家、など名称にかかわらず、子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂。

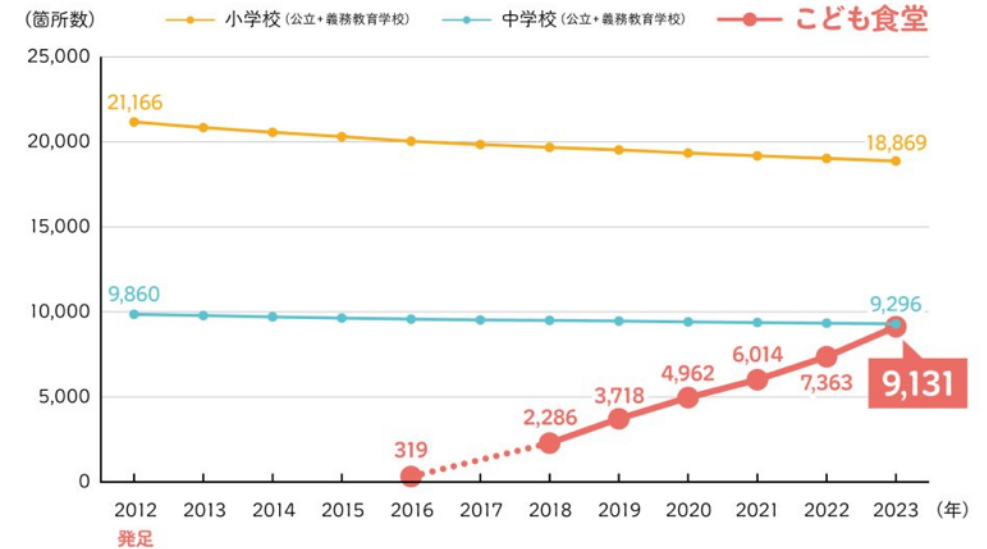
「地域交流拠点」と「子どもの貧困対策」としての2つの大きな軸として発展。各自が、自主的にボランティアで始まることが多く、現在では、全国で9,131箇所（2023年12月調査）あることが明らかに。

■多世代交流拠点としてのこども食堂

参加に条件がないところが78.4%。「多世代交流が主な目的(MA)」が57.8%で、実際、高齢者も参加しているところが6割。子どもに限定しているところは4%。生活困窮者に限定しているところは5%。=つながりづくり

■認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ

むすびえは全国各地の地域ネットワーク団体と連携し、企業・団体等からの全国に支援を届けるほか、全国センターとして、こども食堂の実態等の調査を行っている。また、地域ネットワーク団体の資金的・非資金的支援を行う。



認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ調査資料より抜粋